

小児科医院の診察場面での乳幼児の啼泣と医療者・母親の乳幼児に対する援助の関係

藤原千恵子，宮野遊子，絹巻 宏，日野利治，藤田 位，山入高志，寺田春郎，永井利三郎

【目的】6ヶ月から3歳未満の乳幼児の診察場面において，母子の背景要因と乳幼児の啼泣状態が医師・看護師および母親の乳幼児に対する援助とどのような関係があるかを明らかにする。

【方法】①対象：小児科医院を受診した乳幼児と母親 201 組および4箇所の医院の医師・看護師。②時期：2006年3月～5月。③待合室での母親への質問紙調査（年齢，これまでの受診時の状況，母親の心配や不安 STAI，啼泣に対する母親の思い）。④診察室での参加観察（10場面での啼泣レベルチェックリストを用いて啼泣の有無をチェックし，医師・看護師・母親の声かけと介助の有無を記載する）。⑤大学の倫理委員会の承認を受けた。

【結果・考察】有効回答 190 名。乳幼児の啼泣はベッドでの腹部触診，耳，のどの診察場面で多かった。医師や看護師はのど，耳，腹部診察場面で声かけや介助が多かった。看護師は母親の不安が大きい時に援助していた。聴診，のど・耳の診察場面の啼泣時には，看護師が介助し，母親は声かけを行っていた。

診察場面での乳幼児の啼泣は，直接身体に触れる場面で多くなっていた。これは，先行研究の結果と一致している。腹部触診で啼泣が多かったのは，母親との分離が不安の増強に繋がるためと思われる。

医師は，受診回数の少ないまだ慣れていない乳幼児に意識的に声をかけ，看護師は乳幼児の介助をし，母親は声をかけるというように，それぞれの役割に応じた対応をしている。看護師は，子どもの機嫌がよい場合や母親の不安が大きい場合に声かけを行い，反対の場合に介助を行っており，乳幼児の機嫌と母親の心理状態に合わせて，援助内容を使い分けて，母子の様子に敏感に反応した対応をしている。母親では，一人っ子や啼泣しやすい乳幼児の場合と，また逆に不安は低い場合に声をかける行為がみられた。母親の行為には，心配がある場合とゆとりがある場合に同じ行動が見られることから，影響している要因を十分見極めて観察する必要がある。